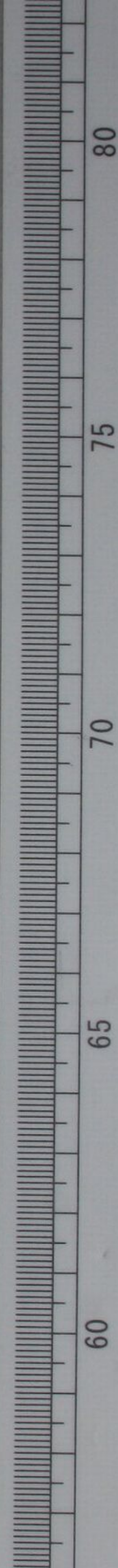




中村俊定文庫  
文庫 18  
257  
1



音柳琴  
特用

叙

師いづるものも俳諧の本意を  
如くとは違ふ者有るもの一  
助ありしは減りしは初奇  
うらやまをいふはさうりや  
ちりり其法をいふはさうり  
家々の句意の法區ありて



中村

ふらふらと揚子江の舟に  
と梅のしずくを流し渡りて  
塔の影をこぼす舟の影  
ゆきゆきと舟の影の影  
如(る)と舟の影の影  
舟の影の影の影の影  
昔師生の影は白き影

月く日如き、舟の影  
舟の中へ舟の影の影  
舟の影の影の影の影  
日記予の舟中へ舟の影  
舟の影の影の影の影  
舟の影の影の影の影  
舟の影の影の影の影  
舟の影の影の影の影

得業とていへば  
まの如く様もなると  
人の世も如く難法家も  
よかしく名師とて出  
多ましくと生菊一束  
物かよひぬとて  
此の次は母の鑑とす

あまの海にたてゝ  
まの如く様もなると  
あまの海にたてゝ  
あまの海にたてゝ  
あまの海にたてゝ  
あまの海にたてゝ  
あまの海にたてゝ  
あまの海にたてゝ  
あまの海にたてゝ  
あまの海にたてゝ

婦一よりし族おとと十  
きん何きらなるこ  
おたた跋たおし  
のまのなまの  
名歎おまの  
おしん  
正本のうへへ  
昔師有

思しあかしく  
午ま月  
中  
中



俳諧名歌のむすしよ

信守

来老

子母らふ心しるる向く姑ふ

出のふふ花ふとのしるる向く  
之のしるる向く  
見法師のふとあはらむる向く  
子とらふ姑とく吉く梅の枝の末のふ  
うらむる向く  
是も梅の枝の末のふ



いまの世に改とて此福のと願傷の句と  
 中や子の所毒あり事とたふに杜詩香  
 猪面解鶴鶴粒瑞梧梅蒼陰會  
 枝 乞鶴新啄余寸香猪粒陰會  
 あす守瑞梧枝とゆふさこ又新吉々  
 何さちあや袖よりちあふ秋の裏とて  
 着とととあふに秋 水尾院  
 未読の 海芽生も秋の裏の袖より  
 何さちあや袖よりちあふ秋の裏とて  
 この筆もあふに秋の裏とて

中とて大なるお毒はあふに秋の裏とて  
 何さちあや袖よりちあふ秋の裏とて

又

襟巻の夜と通に痛むんとあふ

誰うのあふに三井の味方実

此身白三井の味を解人あふに秋の裏とて  
 何さちあや袖よりちあふ秋の裏とて  
 何さちあや袖よりちあふ秋の裏とて  
 何さちあや袖よりちあふ秋の裏とて  
 何さちあや袖よりちあふ秋の裏とて  
 何さちあや袖よりちあふ秋の裏とて







此君の意なき家地獄の如

二南と云ふは口説也

此は南の意なき家地獄の如

此は南の意なき家地獄の如

此は南の意なき家地獄の如

此は南の意なき家地獄の如

此は南の意なき家地獄の如

此は南の意なき家地獄の如

此は南の意なき家地獄の如

此は南の意なき家地獄の如

又 此は南の意なき家地獄の如

### 又 此は南の意なき家地獄の如

此は南の意なき家地獄の如

此は南の意なき家地獄の如

此は南の意なき家地獄の如

此は南の意なき家地獄の如

此は南の意なき家地獄の如

此は南の意なき家地獄の如

やし

桂坊私日記の如くも死活の痛敷多  
たぬとされぬ所も事無くて苦む  
いふもつらき事先はあつて  
よき事なり

又

昨夜も干しくおれの陣痛痛と  
夜枕の中へ寝ぬ録の音  
此の夜の音は只様と云ふ所の  
句の如きの聲を成るるなりと

句と夜枕と云ふ句の業も  
のしり句毎にあつてしや眼大切  
又

多しつらう中と云ふ物  
袖安馬の事と云ふ  
此の句はなほしりて其の  
よむ所の事なり  
あつてはなほしりて  
よむ所の事なり  
又



君思とる約樹とるの  
川の口吹く風の音はなほの昔の  
しるしの事とて思ふの音の  
長くしるしの事とて思ふの音の  
昔思ふ君思ふの音の  
人の音のしるしの事とて思ふの  
長くしるしの事とて思ふの

塔屋司

長女とる約樹とるの

沾出首拜

古十三の如く先師の  
とるしるしの事とて思ふの  
昔思ふ君思ふの音の  
人の音のしるしの事とて思ふの  
長くしるしの事とて思ふの  
日記ありて也

春部

新穀

元日の庭や苗木のまきとあ  
 きののまらさとも梅の舟等  
 おのりやまのよるーらうー  
 忌てい佛よこしむもの喜  
 えりや又あししき新飯  
 入事ものてこそ梅こと松様  
 六祖善善院那持明院冬臺

照事

沾徳

春阿

魚子

魚契

梅山

沾山

よこしき子村のけいー松の梅  
 園の袖香におけさの鏡をい  
 長母  
 千玉  
 沾席

梅のや木を結こころの上  
 じつり香よ昔汝うも梅の香  
 柴のや香と歌て梅の香  
 日の初そのあつふや梅はも  
 長母  
 光輝  
 梅香  
 林忌

皇路よあち中の梅結る  
 名始か白く流る梅のさる  
 沾徳  
 寧月

梅の香や祝けと斗小紫垣 岸山  
 じりあきて只の居と如ふなり 五麓  
 梅の香や香かよ入地あは 和宴  
 身ゆらん愛し身はほわつ松松 汗牛  
 梅の香匂しと香い満より 沽山

花よりあつとあつとや来花江 赤花  
 お梅や赤くさうてい進みつる 文編  
 お梅や地と破てうつらさ 色山

外巻の六の巻のふみき梅の香なり

乃人へし藤より入とそや物梅 沽山

五七

此の梅の香や梅の香 沽山  
 こころいふさうと想あつく 沽山  
 来の梅よ赤お香の茶を山て 香何  
 梅の香のまへまて香か 懐山  
 筆と梅の香よと月のおめい 桂室  
 梅の香のまへまて香か 輟之

師の思と味を慕ふ如く  
 如くくくくくくくくく  
 白くくくくくくくくく  
 今のおちの舟の河は  
 夕涼の地や帯よとあり  
 世い刀くくくくくく  
 法儀くくくくくくく  
 けくくくくくくくく  
 能くくくくくくくく  
 くくくくくくくくく

法院  
 喜阿  
 標止  
 法止  
 輜止  
 法止  
 法止  
 法止  
 法止

柳を流るる河の月  
 女くくくくくくく  
 くくくくくくくく  
 似くくくくくくく  
 足くくくくくくく  
 古くくくくくくく  
 くくくくくくくく  
 菰枝と十有のくく  
 足指くくくくく

輜止  
 標止  
 法止  
 法止  
 法止  
 法止  
 法止  
 法止



舟にりて世を電にふんらんや  
 なくとくの抱えゆく木  
 音は流れゆく舟よ雲の月  
 唐のえさももをうのり  
 大めくきもお瘧病をわ  
 望の波もあつて牧場  
 船は進むらんらん地も  
 梁の瓢子種は何く  
 白鳥の居るもまのねの  
 と海をゆくもて唐の山も

輪し  
 柱定  
 毒阿  
 橋止  
 柱定  
 橋止  
 毒阿  
 橋止  
 柱定

あつ

舟や一舟をきし家の星  
 うつくしや鳥の歌はの  
 舟やとわくはるの舟  
 舟はつやもま花さの教養

舒嘯  
 比國  
 比牛  
 圃月

舟は舟本抱えしにやぶの中  
 うつくしや鳥の歌はの舟  
 うつくしやもま花さの教養

比德  
 乾什  
 和雄

その清涼しきふしの裏 甲乙和 白羽  
うらみの舌と目りよ 甲乙和 沽止

陸橋

物のそと雲ととも好い物か 沽徳  
昔年の多しとてあつた 平所  
雪くるとも折くのち 甲乙和 翠羽  
あつたの半邊 甲乙和 雅通

李 甲乙和 柳のそと 甲乙和 沽徳  
を少折のり 甲乙和 冬

歌も柳のそと 甲乙和 沈々 李漢  
ふり香のそと 甲乙和 柳 竹塙  
新層ふ 甲乙和 柳 千伝  
我園と 甲乙和 柳 海山

大年

美から 甲乙和 柳 安土  
お橋 甲乙和 柳 遷延

梁成

嵐 甲乙和 柳 梅川  
鳥社

初午やに花うけく又中地 沾徳  
初午や松十の躑いし向う鳥 甲子 羽客

嬌心

朝も昔きくを中門 百之

菜の花の首をのぎたはら 甲子 玉筍  
花らやのまらしく 甲子 竹子  
箒もや首をのぎたはら 甲子 度身  
はら 甲子 お控

一啄

月あはれとあはれ 拂也 雑草の 鋤 躑

雑草

一人の蕨の糸 松 柏 沾徳  
あはれとあはれ 甲子 湖十  
あはれとあはれ 甲子 白土  
あはれとあはれ 甲子 松山  
あはれとあはれ 甲子 舎人

萱ゆや、なまはれおむ松一  
 日いゆわつたの形とが稚子  
 痛つゝよは解え香をいそ  
 もとのこゝろふ本まのあ  
 硝子の梅のまゝ、落月松  
 柄杓一海しあのまの  
 菊文の井は信の院まう  
 おつておまゝと十月のあ

沽山 魚子 如簧 潤月 局菴 舞子 魚子 沽山

朝の一人くみ陣上  
 かりの舎よ管お狭ゆよ  
 高平のつまはゆるも表こ  
 書もまゝ、黄の、かこり  
 多物と先のぬすら小紫垣  
 大工包せらよ、雲際の花  
 常よまゝまるとする昆布の極  
 たら日よ、きしと梅橋の  
 榎木屋のまゝ、けつてお日  
 菊一柄く麻いふまゝ

淵月 局菴 如簧 魚子 沽山 潤月 局菴 如簧 魚子

じつじつ 秋の胡蝶の海を  
 葉をさるるくく 今も情は  
 海に流るるの苦勞の神  
 環のくぐりの扇のきりぬ  
 知るる類のくぐりぬ  
 宵中くぐりぬ  
 人々のくぐりぬ  
 筆より 秋の山  
 畏れぬの海に  
 海に 糸の糸

満月  
 如葉  
 局菴  
 沽心  
 魚子  
 満月  
 如葉  
 局菴  
 満月  
 魚子

兼平く月お毒の海  
 おり斗よ秋のきりぬ  
 係尔杭傷の海  
 新因まゝ 酒と  
 長海よか 秋の海  
 悲切ちる 海に  
 柔もさなる 海に  
 瓶の無骨の 柳

如葉  
 沽心  
 局菴  
 満月  
 魚子  
 満月

親法

あわのくまの 入谷の光  
つらふくあわの時と 碓氷の奥  
あわのくまの 洞の中  
あわのくまの 甲府 常河

因書

あわのくまの 甲府 常河  
あわのくまの 甲府 常河  
あわのくまの 甲府 常河  
あわのくまの 甲府 常河  
あわのくまの 甲府 常河

あわのくまの 甲府 常河  
あわのくまの 甲府 常河  
あわのくまの 甲府 常河

因書

あわのくまの 甲府 常河  
あわのくまの 甲府 常河

因書

あわのくまの 甲府 常河  
あわのくまの 甲府 常河

あわのくまの 甲府 常河  
あわのくまの 甲府 常河  
あわのくまの 甲府 常河  
あわのくまの 甲府 常河

首のふくとおねまきやんせ  
 るのりと海のりあれんせ  
 物よあゆし止るんとせりゆ  
 毎のまよふおねまき  
 止るく耳よきんせ  
 陸珠  
 虫雪  
 鳥雪  
 霞  
 秀十

呼名徒白喜  
 怒目為誰嘆

立よはなもとのせのりき  
 費うよおねまき岸のまよ吹  
 孫まきしりおねまき  
 お伴しりおねまき  
 又しりおねまき  
 旅くゆのりおねまき  
 おねまきおねまき  
 能うおねまき  
 夕時おねまき  
 悲りおねまき  
 沽山  
 素為  
 團月  
 翠羽  
 玉骨  
 精雪  
 素為  
 沽山  
 鳥雪  
 團月

管のうら三斗文のせ限る  
 知直ののたへは合ふ  
 大兵ののち音はる小堂  
 土のあはる帯の打染  
 春の日の光はれは際ぬこ  
 古の菊の余のさあつきの乳  
 つれあふあはれはる  
 貫くくはる句はる  
 陰よの心解契候ははの庭  
 有轉るはあのみまはてこ

梅香  
 玉寄  
 圃月  
 景花  
 浄心  
 梅香  
 玉寄  
 圃月  
 浄心

春毎の向う院もりの旅の  
 ちとる腕とひりよのれ  
 襖新々への恨はるあはれ  
 集くともあはるあはるの川  
 蝶もらも舞はれはるあはる  
 完ぬははるあはるあはる  
 更にもあはるあはるあはる  
 脚子もあはるあはるあはる  
 紫のうら三斗文のせ限る  
 人あはるあはるあはる

梅香  
 玉寄  
 圃月  
 景花  
 浄心  
 梅香  
 玉寄  
 圃月  
 浄心



神代小宮の文記のありて  
 幸ひしとていふにけし  
 唐土のうゝのちも好治郎  
 只のぬ舌く 幸のり毒の  
 神代ていふもあつても下  
 くのぬと翻しての味く

活止  
 松与  
 玉与  
 圃月  
 寄月  
 素茂

映 影  
 有く、富士のあち九杯のち  
 活 徳

神代  
 帯、福の川も流るに千と  
 杉原のしほ志まぬゆきか

活 徳  
 玉 寄

手中の伊達のしりやも  
 くのちむとて家もや小宮  
 山もや転しあつてあつち

活 徳  
 三 光  
 百 養

吾へて度と葉籠のあやむの所  
 一日の山原へあつちあつち

活 徳  
 活 剛

やうやくちのつらさよ 乞作  
白うらぶお髪いふちの下 度冠  
風ついでなまふらむの緒 習翅  
菊ふらふと桜あふり花白 魚山

燕一伝るころ

活るや木方の山隈く花の若 未白  
飛こやうみねのさかちの山 山  
さる角の清うやちの海かき 半溪  
落もちと葉して種ぬれか 没光  
雪のもつらふも月こそく 白扇

こころ入るいふもいふもいふ 山  
ねらふの風もあつらふもあつら 山  
ねらふの風もあつらふもあつら 山  
あつらふの風もあつらふもあつら 山  
あつらふの風もあつらふもあつら 山  
あつらふの風もあつらふもあつら 山  
あつらふの風もあつらふもあつら 山  
あつらふの風もあつらふもあつら 山

志の心海のちやいねいり  
昨松の床はさるる木所  
烟のよもふ蝶やねん  
先くといひぬいぬい  
志の海はさるる色の松  
美しきしよの系門  
口淋しきねの松は  
信しきしよの松は

沽山  
自慙  
沾鱗  
魚費  
自悲  
比止  
魚費  
比鱗

吾國のみとももて教打  
あわの松もさるるの松  
新うけて信のちやいね  
こやけい先いぬいぬい  
時をさるる松と松は  
松のよもふ蝶やねん  
しよもふ蝶のよもふ蝶  
時をさるる松と松は  
白松のよもふ蝶やねん  
松のよもふ蝶やねん

沽山  
自悲  
比鱗  
魚費  
自悲  
比止  
魚費  
比鱗

不<sup>レ</sup>事<sup>ヲ</sup>。輕<sup>ク</sup>し<sup>テ</sup>。清<sup>ク</sup>朱<sup>ヲ</sup>。比<sup>レ</sup>鯨  
 中<sup>ニ</sup>。食<sup>ス</sup>。其<sup>ノ</sup>。香<sup>ク</sup>。の<sup>レ</sup>。魚<sup>ノ</sup>。比<sup>レ</sup>鯨  
 之<sup>レ</sup>。何<sup>レ</sup>。も。若<sup>シ</sup>。卵<sup>ノ</sup>。夜<sup>ノ</sup>。の。比<sup>レ</sup>鯨  
 之<sup>レ</sup>。何<sup>レ</sup>。の。運<sup>ビ</sup>。た<sup>ル</sup>。と。の。上<sup>ニ</sup>。人<sup>ノ</sup>。比<sup>レ</sup>鯨  
 日<sup>ノ</sup>。比<sup>レ</sup>鯨。と。河<sup>ノ</sup>。の。世<sup>ノ</sup>。お<sup>ハ</sup>。た<sup>ル</sup>。比<sup>レ</sup>鯨  
 好<sup>ム</sup>。事<sup>ヲ</sup>。の。釣<sup>ル</sup>。一<sup>ノ</sup>。こ<sup>ノ</sup>。の。比<sup>レ</sup>鯨  
 い<sup>ハ</sup>。ゆ<sup>キ</sup>。と。そ<sup>レ</sup>。素<sup>ク</sup>。ら。の。志<sup>ヲ</sup>。女<sup>ノ</sup>。比<sup>レ</sup>鯨  
 顔<sup>ヲ</sup>。ら。る。や。ら。る。と。傳<sup>ハ</sup>。と。何<sup>レ</sup>。比<sup>レ</sup>鯨  
 傾<sup>キ</sup>。城<sup>ノ</sup>。に。其<sup>ノ</sup>。寫<sup>ス</sup>。む。う。ら。な。り。付<sup>テ</sup>。比<sup>レ</sup>鯨  
 其<sup>ノ</sup>。男<sup>ノ</sup>。の。孤<sup>ク</sup>。信<sup>ヲ</sup>。わ。く。何<sup>レ</sup>。比<sup>レ</sup>鯨

膏<sup>ノ</sup>。の。月<sup>ノ</sup>。一<sup>ノ</sup>。村<sup>ノ</sup>。匂<sup>ノ</sup>。の。時<sup>ノ</sup>。方<sup>ノ</sup>。を。り。比<sup>レ</sup>鯨  
 情<sup>ヲ</sup>。重<sup>ク</sup>。し<sup>テ</sup>。何<sup>レ</sup>。の。輕<sup>ク</sup>。の。比<sup>レ</sup>鯨  
 一<sup>ノ</sup>。と。一<sup>ノ</sup>。の。其<sup>ノ</sup>。繁<sup>ク</sup>。き。草<sup>ノ</sup>。の。魂<sup>ノ</sup>。象<sup>ノ</sup>。比<sup>レ</sup>鯨  
 物<sup>ノ</sup>。の。い<sup>ハ</sup>。ら。る。な。の。め。女<sup>ノ</sup>。何<sup>レ</sup>。比<sup>レ</sup>鯨  
 其<sup>ノ</sup>。十<sup>ノ</sup>。の。若<sup>シ</sup>。卵<sup>ノ</sup>。の。捕<sup>ル</sup>。如<sup>シ</sup>。指<sup>シ</sup>。て。比<sup>レ</sup>鯨  
 つ。い<sup>ハ</sup>。ら。る。な。の。め。女<sup>ノ</sup>。何<sup>レ</sup>。比<sup>レ</sup>鯨  
 其<sup>ノ</sup>。十<sup>ノ</sup>。の。若<sup>シ</sup>。卵<sup>ノ</sup>。の。捕<sup>ル</sup>。如<sup>シ</sup>。指<sup>シ</sup>。て。比<sup>レ</sup>鯨  
 其<sup>ノ</sup>。十<sup>ノ</sup>。の。若<sup>シ</sup>。卵<sup>ノ</sup>。の。捕<sup>ル</sup>。如<sup>シ</sup>。指<sup>シ</sup>。て。比<sup>レ</sup>鯨  
 其<sup>ノ</sup>。十<sup>ノ</sup>。の。若<sup>シ</sup>。卵<sup>ノ</sup>。の。捕<sup>ル</sup>。如<sup>シ</sup>。指<sup>シ</sup>。て。比<sup>レ</sup>鯨

傍 西云

初さうく	一	そと	乃	万	あ	な	ま	初	松島	や	ち	あ	つ	傍	い	心	あ	ら
穽	あ	と	ま	り	山	穽	入	お	い	池	の	形	少	し	て	さ	ら	木
う	と	ら	よ	と	も	強	に	穽	と	門	い	し	こ	さ	ら	斗	の	形
お	ゆ	ら	き	松	子	連	は	ふ	さ	ら	木	攢	い	ぶ	ら	後	い	款
無	當	の	売	よ	さ	ら	く	の	を	為	の	催	種	宴	緑	祇	明	自
尾	谷	年	素	巨	相	巴	船	自	慙	祇	明	宴	緑	催	種	尾	谷	
沽	德	尾	谷	年	素	巨	相	巴	船	自	慙	祇	明	宴	緑	催	種	尾

寄	松	一	松	の	ま	ま	穽	文	年
武	士	の	ち	あ	ま	し	山	さ	ら
毛	後	の	自	や	お	名	の	穽	日
さ	ら	く	木	あ	ま	も	披	穽	緝
多	葉	屋	と	泉	の	穴	入	る	穽
筆	提	て	り	行	ゆ	り	山	さ	ら
町	中	よ	ら	く	山	の	さ	ら	く
山	里	の	喜	や	目	ま	く	さ	ら
ま	ら	く	さ	ら	く	も			

甲 穽  
 乙 穽  
 丙 穽  
 丁 穽  
 戊 穽  
 己 穽  
 庚 穽  
 辛 穽  
 壬 穽  
 癸 穽

常心

多る者てふるのしり業のむ 園新  
引曲ぬりかゝるものちん さうかき 素玉

睡思

海棠く 睡字 移ス 鞆の上 旧室

古烟

喜の御也本所ハ 甚しの補存也 法徳  
本所ハ 喜の御也本所ハ 甚しの補存也 幸徳  
うゝの 喜の御也本所ハ 甚しの補存也 五井  
喜の御也本所ハ 甚しの補存也 元彦  
喜の御也本所ハ 甚しの補存也 月志

廿七

喜の御也本所ハ 甚しの補存也 吉彦

喜の御也本所ハ 甚しの補存也 紀逸

喜の御也本所ハ 甚しの補存也 祇北

喜の御也本所ハ 甚しの補存也 權非

喜の御也本所ハ 甚しの補存也 午川

喜の御也本所ハ 甚しの補存也 治止

善瓦

又わらなはれぬとて ぬの志 秋 瀾月

此字の目楊々々々夜の棚 溪梅  
岸の夜流よりと流より 古蹟  
本よりと流より夜の夜 甲乙和 本泉  
後二 土浦 沽潭

文

夏部

開第

小舟の暮をよめしとるあ志 標山

強きことさのちや更衣 露磯

々小久の衣知ん流佛 沽山文 右秦

もとの

名の通く薙りも手 杜鵑 菊山

るお松や産程のち鳥 舒嘯

物なるをくちひいさし 時鳥 沽長

年横の卯ありてさやゆきき  
 時鳥をのぶと定むらひ  
 月のおおきりの末や杜鵑  
 曉の清く相いの中りきあ  
 月影をふくと離て神公  
 きかよふとあつめや時鳥  
 坂毎の初めはしるう神公  
 船の上の籠き富吉や時鳥  
 世の愛とまして痛まぬ杜鵑

延波  
 如簧  
 團月  
 沾舞  
 古井  
 木氏  
 沾德  
 沾測  
 沾雅

吉くく再あつてははま  
 四つやのふりかふ如由  
 何れはふらぬとぬし句の鳥  
 何れは終に成らに時鳥  
 牽傍て何れも虫や杜鵑  
 何れも守り互に観るの賣り  
 云はれゆく中りや時鳥  
 名にふりよ飛時鳥友枕  
 元は船の鳴せしふ時鳥  
 五月の鳥あつては杜鵑

乞儀  
 又梁  
 芦雅  
 魚文  
 不露  
 皇澤  
 沾墨  
 沾光  
 沾止  
 祇明



新得はあつる鳥下子親  
 魚  
 即ち鳥下子親  
 占吟  
 好い奴けくあつる鳥下子親  
 又麟  
 虹の橋をけくあつる鳥下子親  
 中瀬  
 流の星のとあつる鳥下子親  
 擔山  
 うらみのよき鳥下子親  
 ぬ

鳥下子親の鳥下子親  
 五帆

後より川へさるる鳥下子親

七

静かな鳥下子親  
 占山  
 入梅の積乃積乃あつる鳥下子親  
 白立  
 光悦りあつる鳥下子親  
 百測  
 夕小株とあつる鳥下子親  
 沾山  
 青洲の鳥下子親  
 標山  
 透ぬあつる鳥下子親  
 山

作りし庫裏紙や子紋身  
 白  
 子かみの所おらねえは  
 巨海  
 子もめて親の松のとも  
 比代  
 どもつゝ子もも書とらふ  
 標山  
 投印中つゝはふ葉緒酒  
 石海  
 何とあつゝある傾城  
 法止  
 旨くと激つゝ脂の股と  
 標山  
 あつゝらねるもはぼ入  
 法止  
 青は月照つゝ斗と雲は  
 法止  
 吹貝の所や知らん  
 巨海

氏結のふいたつて多る村  
 白  
 吾は海口の舟安ら  
 標山  
 抱く癖は花を喜ぶ女子  
 比代  
 伽藍を望めと誰然と  
 白  
 公家の扇のし母は別一乃  
 法止  
 流つゝまつゝの竹と  
 比代  
 本陣の内つゝ善徳を  
 標山  
 逆もつゝ持つゝ節の振裂  
 巨海  
 加つゝゝ戸の自由と  
 白  
 美つゝお二をい  
 比代

吾邦をゆくはるき道を知りて  
 懐くしこの志智寺は松  
 豆房の重村の名はもとの  
 是くく扇二なき一なり  
 打給く此能ある秋の暮  
 みこやうよろう丁流の穴  
 虫橋の唐の料理へ更ふこ  
 守の何重の志急をきふ  
 作らや幕いあふとものこ  
 沖糸の鼓ゆくやうく  
 山代  
 橋山  
 石海  
 白石  
 橋山  
 石海  
 白石  
 橋山

高橋

卯也や無からあのかいさ  
 うのころは佛おと乃係  
 字はもや恒とあふ種  
 卯也よんむす徳り恒根  
 檀心

晋阿  
 玉首  
 徳心  
 年止

朝夕の常はありあふも  
 沾旭

麦一穂権系中一は母か  
 羊子

沾徳  
 羊子

去る海に海の初、白牡丹 五七  
土一升を一升に牡丹 楊川  
山のふもと吹きてやん 廣門  
園に牡丹に余牡丹 中集  
蝶くのふもとやん 清志  
蝶くのふもとやん 白牡丹 甲子  
去るのふもとやん 白牡丹 甲子  
素卷

新玉

去る海に海の初、白牡丹 五七  
土一升を一升に牡丹 楊川  
山のふもと吹きてやん 廣門  
園に牡丹に余牡丹 中集  
蝶くのふもとやん 清志  
蝶くのふもとやん 白牡丹 甲子  
去るのふもとやん 白牡丹 甲子  
素卷

江詠

落首や松若離れ姉々許 沽山

菰首やうらまの草跡をたづねて 以餘

流ありまら

田のかたむねふしくや杜多 超波

舟の跡流ある蒲の志 魚子

一村のこゝろいさなむかひつゝこ 林忌

流りよの硯の池や杜多 舟月

女家のゆりかへりうまひさ 彦月

静な驚

吉妻の奥をさぐる鳥の志 沾徳

人の世を転換しつゝや妻の秋 沾債

流りこらの妻おれは吹雪の 祥海

言さやせえ袋の柳のしる 来丸

唐のよちのむしや妻の志 沾山

日脚斜やうんこもり鳴 蜀相

帳とかがり帳いし帳の流さけく  
久しあつらるるさゆふあり  
おねふよしつひのまのあ  
先下部しむたを 新  
しきしめやまのりし新  
後しつたれし運ふし  
あはれしとあつらるる業  
るけし教とふらるる  
萱ののふし思しとく思  
蛇の流るるの 勢とく  
玉寄 橋石 園目 素花 橋石 玉寄 素花 玉寄 橋石 玉寄

鳥中ふ橋とあつらるる  
は白つひの玉もく  
鶴鶴やめしあつらるるの上  
子とあつらるる日あつらるるの牛  
あつらるるの飛と寝く  
あつらるるのあつらるるの  
船渡のいしつひと日と  
勅額とつひと薨とく  
あつらるるのあつらるるの戒と  
あつらるるのあつらるるの  
玉寄 素花 橋石 玉寄 素花 橋石 玉寄 素花 橋石 玉寄

古原一里に... 玉骨  
 一の... 玉骨  
 湯治... 玉骨  
 拙... 玉骨  
 科... 玉骨  
 師... 玉骨  
 吾... 玉骨  
 噴... 玉骨  
 借... 玉骨  
 是地... 玉骨

店中... 玉骨  
 曾と... 玉骨  
 多... 玉骨  
 一... 玉骨

馬先  
 可幸

音の口と力なれんて行 了りて 岸日

一節

海にみちて花より花の 序山

くらり花のまじりて花の 汶光

介物なるまじりて花の 花 止

送梅

何なるまじりて花の 花 鋤耕

花のまじりて花の 花 旭

花のまじりて花の 花 出礎

わらわら茶葉茶葉と花のまじりて 沽司

花のまじりて花のまじりて花のまじりて 波系

花のまじりて花のまじりて花のまじりて 雲子

花のまじりて花のまじりて花のまじりて 白る

花のまじりて花のまじりて花のまじりて 漁夕

花のまじりて花のまじりて花のまじりて 撰水

花のまじりて花のまじりて花のまじりて 仁 和歌

一節

花のまじりて花のまじりて花のまじりて 平砂

花のまじりて花のまじりて花のまじりて 中池



権 (四)

しんまの... 伴日  
又... 幽

毎の墓の跡

白... 来白

見... 沽山

あ... 丁

あ... 白羽

あ... 白羽

下

あ... 妾所

あ... 新湖

あ... 三湖

あ... 曼美

母

あ... 忠告

あ... 沽文

あ... 病が

あ... 等山

あ... 羽

禪の先へまゝに大輪角力  
 序山  
 名なる濃らばしもの所  
 序山  
 多しと作らばしもの者  
 序山  
 河と漱の如く果てらばし  
 序山  
 多しと作らばしもの者  
 序山  
 多しと作らばしもの者  
 序山

村の名は神はかゆん神  
 山山  
 子孫のいとまをまほの所  
 魚貴  
 ひさしきものまのうらと也  
 遷為  
 縁借ておのまのうらと也  
 橋山  
 飯りまの。後の子いれ  
 字直  
 中屋まのうらと也の古工  
 遷為  
 他ふ争ふ。七の世中  
 序山  
 物とあはれはくまの橋い  
 序山  
 午一あり。晴の月  
 魚貴  
 世屋まのうらと也の古工  
 字直

本薬句は位名水里  
 序山  
 此は子あつ可も蘊殊の候は去  
 序山  
 及位と唐の呼もやうこ  
 序山  
 相まらく松の赤も松の赤  
 序山  
 よくは<sup>キ</sup>石澤泉山のた  
 序山  
 何れは神物より并は  
 序山  
 此は小松よりあつこ  
 序山  
 教はも又浦のまのり  
 序山  
 御子標の蘭の藤とつく  
 序山  
 愛とる母の信はく破た  
 序山

人のあつる名夏の敷く  
 序山  
 山伏の十海起るる巻は月  
 序山  
 相標の柳もやう  
 序山  
 聖と標の仔儀のまはり  
 序山  
 雲も破よと打くはる波  
 序山  
 炭焼の石もやう  
 序山  
 おやうするは後人  
 序山  
 毎のまはるる  
 序山  
 日あつるは苗代のた  
 序山

鳥の音

夕影や蝶し叶のうら少愈山 汰院  
川花や柳の舞のさき鳴 午寂  
やう尚く鳴や淋さ木の蝶 集枝  
初蝶や切さおふ夕の影 兼泉

照苔

朧く三秋の光を曇り那 佳風  
とりの虫よ己さゆらつと花を 月 瀾  
初ね虫よあつたの露の 已 船

うさきの葉をむしりて草花 新 満月  
鶉のこもあさるおとりのを 海 舟  
川花と柿の葉守るるを 水 江  
夕浪の園志の猿畑のけしを 湖 舟

葉のうさきの葉のむしりて草花

あま藪のうらつたのさき海の家 程 祥  
初より便の拍子のさき那 法 相  
新影よよあつた水のけしを 浦 澤

審美

場末のうさきあつたの蝶を 教 筆 止

角の如く懐き立忘の好む事 和分

昔の如くはさういふ

又懐は竹くし樹のこら 狎せ

物危突の古先は夜の花 山更

あう

孝と云鴉の穴居く少杉家 弓菴

傍眼く下子と憐 鴉子 未仲

いさふの鴉なきは在ぬ木家 為邦

半子

くさ高くは草山あり果 百海

六月の物危くさあなまあり 百海

指たり桂の落るあつさ 半星

一頻海く落るあつさ 多海

年落く埃くくあは果 うのい 休言

お宿麻の松くあつさ 素玉

松香と千すの二倍の思ふ 霞信

しや秋と樹く思ふ 素玉

重箱のいさとはかの浮居民の  
方信り

菊のふさや海のあつさ 山

陽子

國子方々いふはるる百之

角如くはるる書 菅原

初平や昔と心可き 呂入

心轉

蝶おやういふの加減 古山

花玉

涼心はるる白す 梅那

白鴉のみは毛涼く 古原

切節のふ糸入るる涼う那 古徳

唐おの糸のまは下流と心

雨くはるるや夕涼 青嶽

涼心と雨まはるる 如葉

涼心と雨まはるる 古山

夕涼のまはるるや門涼 古山

涼しき縁の岸の村は光  
望みぬとてあやうに招き  
まゝに牛飼家の教りあて  
切ら仕へんをよみか  
之のよの歌にまゝぬ二日月  
暮るる傍りくも月影の  
赤土のわづらひの床に下り  
送別をえりてさるるを入

沾山  
圃月  
素花  
玉寄  
梅雪  
雪月  
圃月  
梅雪

素花に娘とてくく新と  
急にお清り朱の車と立  
の傍りまのあやうに梅  
痕を抱くく遠るの傍  
し平と源平の闘人まゝ  
子梅とてし初の中  
ありきけを静けぬまの  
まののこよのわにわ月  
いらぬとてあやうの  
笛のまゝも歌はらる

玉寄  
梅雪  
雪月  
圃月  
素花  
玉寄

十  
 のうへくははのふゆいゆかま  
 つらうくはし枝の片枝  
 名さのほの洞とあふ  
 好くあつと枝と枝  
 ままのうへまの乳房よま  
 あまの備と一帯一  
 袖のあやまとい日本  
 いまあまの平家い  
 雲のうへくははの毫の  
 とのうへまの飛く子建

格五  
 比上  
 團月  
 素足  
 玉骨  
 玉骨  
 玉骨  
 玉骨  
 玉骨  
 玉骨

此のうへくははのふゆいゆかま  
 一羽ははのふゆいゆかま  
 淨養の葉と枝の秋の声  
 小判形のうへまの  
 厚味まのうへまの  
 母のうへまの  
 海買のうへまの  
 あまのうへまの

素足  
 格五  
 比上  
 團月  
 素足  
 玉骨  
 玉骨  
 玉骨



味子海

自辨や杉原西へ入ると 沾徳

ふら隆

涼きや道の傍を交り水は 沾車

あつとふくやまの地 玉寄

あつとふくやまの地 蓮子 律車

あつとふくやまの地 蓮子 泥牛

あつとふくやまの地 蓮子 魚山

銜峽

課の初よりふくやまの地 橋五

信子海

信子の海に海を渡らんと 白懸

海子

信子の海に海を渡らんと 長指

信子の海に海を渡らんと 辻島

信子の海に海を渡らんと 祥明

信子の海に海を渡らんと 砂井

信子の海に海を渡らんと 市松

信子の海に海を渡らんと 洋水

信子の海に海を渡らんと 寺角



